

アクセント —気仙沼市—

佐藤 亮一

1. はじめに

1. 1 話者・調査項目

本稿では、2006年に宮城県気仙沼市で実施した言語調査のうち、アクセント項目の調査結果を記す。

話者（調査対象者）は、高年層（60歳以上）22名、中年層（40歳～59歳）16名、若年層（20歳～39歳）14名、少年層（高校生）20名、合計72名で、いずれも言語形成期（5歳～15歳）の大部分を気仙沼市で過ごした方々である。

調査項目は類別語彙（金田一1974）中から次の単語（名詞）を選んだ。

1 拍名詞：血・戸＝第1類、木・手＝第3類

2 拍名詞：風・酒＝第1類、石・胸＝第2類、足・犬＝第3類、糸・稲・海・数・肩＝第4類、秋・汗・窓・猿＝第5類

3 拍名詞：桜・煙＝「形」類、頭・鏡・刀・仏・男・団扇・鋏＝「頭」類、朝日・胡瓜・心・姿・涙・枕・油・柱・紅葉＝「命」類、兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓＝「兎」類、苺・薬・鯨・便り・後ろ・卵＝「兜」類

1. 2 調査方法

調査は次の2種類の方法を用いた。

<方法1>（本稿では「方言的発話」と呼ぶことにする）

調査員による以下の指示・説明のもとに、調査語を冒頭においた短文（助詞なし）を発音してもらう。

<これから気仙沼のことばの調子についておたずねします。次のことばを気仙沼の発音で読んでください。たとえば、「肩 痛い」は「カダ イデ」のように。（「そのようには発音しない」と言われたら、「ふだん地元の友達と話すときの発音をお願いします」>

例：「血 出た」「手 洗う」「風 吹く」「桜 咲いた」など。

<方法2>（本稿では「共通語的発話」と呼ぶことにする）

調査員による<次の文を自然な調子で読んでみてください>という指示のもとに、調査語を冒頭においた短文（助詞つき）を読んでもらう。

例：「血が出た」「手を洗う」「風が吹く」「桜が咲いた」など。

東北地方の方言では格助詞の「が」や「を」は使用しない。そのため、「が」「を」をつけた短文を読んでもらうと、アクセントの使い分け能力がある世代（中年層以下に多い）では、ふだ

ん話している方言アクセントではなく、共通語アクセントが現れる傾向がある（佐藤 2005）。そこで、ふだん話している方言アクセントを得ると同時に、アクセントの使い分けの程度をも調査する目的で、この2種類の方法を用いた。

調査員は主として東北大学の大学院生および学部学生であるが、東北大学大学院を修了した研究者数名（筆者を含む）も調査員として調査に参加した。調査結果はすべて録音し、後日筆者が聴き取りを行った。

2. 調査結果

以下に高年層・中年層・若年層・少年層の年層別に、1拍名詞・2拍名詞・3拍名詞の調査結果を記す。

以下の表で、数字は発話総数に対する各型に発音した割合（%）であり、点線の左側は「方言的発話」、右側は「共通語的発話」の結果である。なお、%は小数点以下を四捨五入したものであり、そのため、場合によっては合計が100%をわずかに（1%の範囲内で）増減する可能性がある。

また、それぞれの語について、最も多く発音した型の%を太字で示した。

2. 1 高年層の調査結果

最初に高年層の調査結果を記す。表1は1拍名詞の結果である。

0型は、「方言的発話」では「 $\overline{\text{チーデダ}}$ 」（血 出た）、「 $\overline{\text{トーシメル}}$ 」（戸 閉める）のように、また、「共通語的発話」では「 $\overline{\text{チガデダ}}$ 」、「 $\overline{\text{トーシメル}}$ 」のように、調査語を低い音調（○）で発音したものである。

1型は、「方言的発話」では「 $\overline{\text{キーキル}}$ 」（または「 $\overline{\text{キーキル}}$ 」）（木 切る）、「 $\overline{\text{テーアラウ}}$ 」（または「 $\overline{\text{テーアラウ}}$ 」）（手 洗う）のように、「共通語的発話」では「 $\overline{\text{キオキル}}$ 」「 $\overline{\text{テオアラウ}}$ 」のように、調査語を高い音調（●）で発音したものである。

表1 高年層・1拍名詞

	0型		1型	
血	95	95	5	5
戸	95	90	5	10
木	9	0	91	100
手	9	5	91	95

「血」「戸」は大部分が0型であり、「木」「手」は大部分が1型である。「方言的発話」（点線の左側）と「共通語的発話」（点線の右側）の間に差はほとんど見られない。

この結果は、宮城県北西部（陸羽東線沿線）の調査結果（佐藤 2011）とやや異なる（宮城県北西部では0型と1型の対立が見られない話者が多数認められた）。

表2は2拍名詞の結果である。

0型は、「方言的発話」では「サゲノム」(酒 飲む)のように、「共通語的発話」では「サクオノム」のように、調査語を低い音調(〇〇)で発音したものである。

1型は、「方言的発話」「共通語的発話」とも調査語の第1拍目を[●〇]のように高い音調で発音したものである。

2型は、「方言的発話」では「イネミアル」(稲 実る)のように、調査語の第2拍目を[〇●]のように高い音調で発音し、共通語的発話では「イネガミアル」のように、調査語を含む文節を[〇●▽](低高低)と発音したものである。

表2 高年層・2拍名詞

	0型		1型		2型	
風	91	90	9	5	0	5
酒	86	90	14	5	0	5
石	86	86	14	5	0	10
胸	86	71	14	14	0	14
足	9	10	9	5	82	86
犬	9	0	9	0	82	100
糸	9	0	18	5	73	95
稲	5	0	14	0	82	100
海	5	0	14	0	82	100
数	5	10	14	0	82	90
肩	5	5	14	0	82	95
秋	5	0	14	10	82	90
汗	5	0	14	0	82	100
窓	5	5	14	0	82	95
猿	5	0	14	10	82	90

「風」「酒」(第1類)と「石」「胸」(第2類)は大部分が0型であり、「足」「犬」(第3類)、「糸」「稲」「海」「数」「肩」(第4類)、「秋」「汗」「窓」「猿」(第5類)は大部分が2型である。「方言的発話」と「共通語的発話」の間の差は小さいが、「石」「胸」「犬」「糸」「稲」「海」「数」「肩」「秋」「汗」「窓」「猿」については、「共通語的発話」で2型がやや多くなる。

第1類と第2類が統合している点は、東北地方北部の方言アクセントに共通に見られる現象である。一方、第4類・第5類の語が、第2拍の母音の広狭によって1型(第2拍目が狭母音の「海」「数」「秋」「猿」と2型(第2拍目が広母音の「糸」「稲」「肩」「汗」「窓」)に分かれていない点は、北奥式アクセントと異なる(北奥方言アクセントにも地域差があるが、本稿では、平山1957による新庄市のアクセントを「北奥式アクセント」と呼ぶことにする)。

以上の結果は、宮城県北西部(陸羽東線沿線)の調査結果(佐藤2011)と類似している。

表3は3拍名詞の結果である。

0型は方言的発話では「サクラサイダ」のように、共通語的発話では「サクラガサイダ」のように、調査語を低い音調(〇〇〇)で発音したものである。2型は「方言的発話」「共通語的発話」とも、調査語を[〇●〇](低高低)と発音したものである。3型は、「方言的発話」では調査語を[〇〇●]、「共通語的発話」では調査語を含む文節を[〇〇●▽](稀に[〇●●▽])と発音したものである。1型は「方言的発話」「共通語的発話」とも調査語を[●〇〇]と発音したも

のである。

表3 高年層・3拍名詞

	0型		1型		2型		3型	
桜	95	86	0	0	5	0	0	14
煙	95	90	0	0	0	5	5	5
頭	14	5	0	0	14	10	73	86
鏡	14	0	0	0	9	14	77	86
刀	9	0	0	0	14	14	77	86
仏	9	5	0	0	14	10	77	86
男	9	0	0	0	9	10	82	90
団扇	9	5	0	0	5	14	86	81
鋏	14	5	0	0	9	14	77	81
朝日	9	5	0	0	77	76	14	19
胡瓜	0	0	0	0	100	100	0	0
心	14	5	0	0	27	14	59	81
姿	14	5	0	0	9	33	77	62
涙	9	0	0	0	9	38	82	62
枕	23	10	0	0	9	14	68	76
油	18	5	0	0	9	14	73	81
柱	3	10	0	0	14	14	73	76
紅葉	5	0	0	0	95	100	0	0
兎	5	14	0	0	95	81	0	5
狐	5	10	0	5	91	71	5	14
雀	5	0	0	0	95	100	0	0
背中	14	0	0	0	86	100	0	0
鼠	5	0	0	0	95	100	0	0
蚯蚓	5	10	0	0	95	90	0	0
苺	9	0	0	0	91	100	0	0
薬	5	5	0	0	95	95	0	0
鯨	5	10	0	0	95	86	0	5
便り	24	14	0	0	76	82	0	5
後ろ	19	5	0	0	10	27	71	68
卵	0	5	0	0	100	95	0	0

「桜」「煙」は大部分が0型、「朝日」「胡瓜」「紅葉」「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」「蚯蚓」「苺」「薬」「鯨」「便り」「卵」は大部分が2型、「頭」「鏡」「刀」「仏」「男」「団扇」「鋏」「心」「姿」「涙」「枕」「油」「柱」「後ろ」は大部分が3型であり、1型は皆無である。それぞれの語のアクセント型は、この地域における伝統的な方言アクセント型を示していると考えられる。

また、以上の結果は、宮城県北西部（陸羽東線沿線）の調査結果（佐藤 2011）と類似している。

「方言的発話」と「共通語的発話」の差は小さいが、「姿」と「涙」では「共通語的発話」で3型がやや減少し、2型が増加している。また、「心」では「共通語的発話」で3型が増加し、0型と2型が減少している。

なお、22名の高年層話者のうち、かなり無型アクセント（無アクセント）的な話者が3名見られた。以下に、その内容を記す。

話者A（1942年生まれ、調査時64歳、女性。15歳～17歳に鳴子、それ以外は気仙沼。父は気仙沼、母は鳴子出身）は、「方言的発話」「共通語的発話」とも、1拍名詞は0型と1型の対立が明瞭であった。しかし、2拍名詞は、「方言的発話」では「足」の2型以外はすべて1型（●○）であり、「共通語的発話」では「秋」の1型以外はすべて2型（○●▽）であった。また、3拍名詞は、「方言的発話」ではすべて2型（○●○）、「共通語的発話」でも「桜」の0型以外はすべて2型（○●○▽）であった。

話者B（1938年生まれ、調査時68歳、女性。外住歴なし、両親とも気仙沼出身）は、1拍名詞は「方言的発話」「共通語的発話」ともすべて1型であった。2拍名詞は、「方言的発話」ではすべて1型（●○）であったが、「共通語的発話」では0型（「風」「酒」）と2型（それ以外の語）の対立が認められた。3拍名詞は、「方言的発話」では、一部の語に0型（「煙」「油」「便り」「後ろ」）と3型（「団扇」「鋏」）が見られたが、それ以外の語はすべて2型（○●○）であった。しかし、「共通語的発話」では、多くの語を伝統的な方言アクセント型で発音した。すなわち、この話者は、「共通語的発話」の方が「方言的発話」より方言アクセント型を発音したことになる。

話者C（1940年生まれ、調査時65歳、男性。18歳～20歳・東京、20歳～24歳・福島、両親とも気仙沼出身）は、1拍名詞は「方言的発話」「共通語的発話」とも0型と1型の対立が明瞭であった。2拍名詞は、「方言的発話」では、0型（「風」「酒」「犬」「汗」）と1型（それ以外の語）の対立が認められたが、伝統的な方言アクセント型から逸脱している語が多かった。しかし、「共通語的発話」では大部分の語を方言アクセント型で発音した。3拍名詞は、「方言的発話」では伝統的な方言アクセント型から逸脱した語が多かったが、「共通語的発話」では、大部分の語を方言アクセント型で発音した。すなわち、この話者も話者Bと同様に、「共通語的発話」の方が「方言的発話」より方言アクセント型を発音したことになる。

2. 2 中年層の調査結果

表4 中年層・1拍名詞

	0型		1型	
血	100	94	0	6
戸	100	94	0	6
木	19	13	81	88
手	13	0	88	100

高年層と同様、「血」「戸」は大部分が0型であり、「木」「手」は大部分が1型である。「方言的発話」（点線の左側）と「共通語的発話」（点線の右側）の差は小さい。

表5 中年層・2拍名詞

	0型		1型		2型	
風	100	94	0	0	0	6
酒	100	94	0	0	0	6
石	75	75	6	0	19	25
胸	88	44	0	0	13	56
足	18	13	6	0	76	88
犬	6	0	0	0	94	100
糸	6	0	18	6	76	94
稲	6	0	18	0	76	100
海	13	0	19	13	69	88
数	28	0	22	7	50	93
肩	13	6	19	13	69	81
秋	6	0	19	31	75	69
汗	13	0	0	6	88	94
窓	6	0	13	13	81	88
猿	6	0	13	25	81	75

「風」「酒」「石」は大部分が0型、「足」「犬」「糸」「稲」「海」「肩」「秋」「汗」「窓」「猿」は大部分が2型である点は高年層と同様である。しかし、「胸」は、高年層と比較すると、「共通語的発話」で0型が減少し（71%＝高・44%＝中）、2型が増加している（14%＝高・56%＝中）。この現象は共通語化であると考えられる（「胸」の共通語アクセントは2型である）。また、「数」の「方言的発話」では、高年層と比較すると2型の割合が減少し（82%＝高・50%＝中）、0型と1型が増加している（0型→5%＝高・28%＝中、1型→14%＝高・22%＝中）。

表6 中年層・3拍名詞

	0型		1型		2型		3型	
桜	100	100	0	0	0	0	0	0
煙	100	100	0	0	0	0	0	0
頭	25	25	0	0	6	0	69	75
鏡	19	6	0	0	0	6	81	88
刀	19	6	0	0	0	0	81	94
仏	13	13	0	0	6	0	81	88
男	6	6	0	0	0	0	94	94
団扇	19	13	0	0	0	0	81	88
鋏	13	0	0	0	6	19	81	81
朝日	0	0	6	13	88	88	6	0
胡瓜	0	0	6	6	94	94	0	0
心	19	13	0	0	19	6	63	81
姿	6	0	6	13	56	81	31	6
涙	19	19	6	6	25	31	50	44
枕	25	19	0	0	13	19	63	63
油	25	38	0	0	13	13	63	50
柱	25	38	0	0	0	6	75	56
紅葉	6	0	6	19	88	75	0	6
兎	19	25	0	0	81	69	0	6
狐	13	19	0	0	88	69	0	13
雀	25	19	0	0	75	69	0	13
背中	19	25	0	0	81	75	0	0
鼠	6	13	0	0	94	81	0	6
蚯蚓	6	6	0	0	94	94	0	0
苺	19	31	0	0	81	63	0	6
薬	6	13	0	0	94	88	0	0
鯨	44	31	0	0	50	44	6	25
便り	6	13	6	13	81	69	6	6
後ろ	25	25	0	0	6	6	69	69
卵	6	19	0	0	94	81	0	0

「桜」「煙」はすべて0型、「朝日」「胡瓜」「紅葉」「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」「蚯蚓」「苺」「薬」「便り」「卵」は大部分が2型、「頭」「鏡」「刀」「仏」「男」「団扇」「鋏」「心」「枕」「後ろ」は大部分が3型である点は高年層と同様、ないし類似する。

「姿」「涙」「油」「柱」は、以下に示すように、高年層と比較すると3型の割合が減少している（左側は「方言的発話」、右側は「共通語的発話」）。

姿：77%・62%=高 31%・6%=中
 涙：82%・62%=高 50%・44%=中
 油：73%・81%=高 63%・50%=中
 柱：73%・76%=高 75%・56%=中
 上記の語がどの型にシフトするかは語によって異なるが、「姿」は2型の割合が増加している（2型の割合→9%・33%=高 56%・81%=中）

「油」「柱」は0型の割合が増加している（「油」の0型→18%・5%=高 25%・38%=中。「柱」の0型→3%・10%=高 25%・38%=中）

一方、「鯨」は2型が減少し、0型が増加している（鯨の2型→95%・86%=高 50%・44%=中。鯨の0型→5%・10%=高 44%・31%=中）。

以上のうち、「鯨」の2型→0型の変化（世代差）は共通語化であると考えられる（表12参照）。

なお、16名の中年層のうち、かなり無型アクセント（無アクセント）的な話者が1名見られた。話者の生年・年齢・居住歴など、および、アクセントの内容は以下のとおりである。

1950年生まれ、調査時55歳、外住歴なし。両親とも気仙沼出身。

「方言的発話」では、1拍名詞・2拍名詞はすべて0型、3拍名詞は、大部分の語が0型（「朝日」「胡瓜」「鼠」「便り」「卵」は2型）。「共通語的発話」では、1拍名詞・2拍名詞は方言アクセント型（型の対立あり）、3拍名詞は0型が多いものの、「方言的発話」よりは方言アクセント的。すなわち、この話者は（高年層話者の中で無型アクセント的であった話者B・話者Cと同様に）「共通語的発話」の方が「方言的発話」より方言アクセント型を発音したことになる。

2.3 若年層の調査結果

表7 若年層・1拍名詞

	0型		1型	
血	100	100	0	0
戸	86	100	14	0
木	7	0	93	100
手	0	0	100	100

高年層・中年層と同様、「血」「戸」は大部分が0型であり、「木」「手」は大部分が1型である。「方言的発話」（点線の左側）と「共通語的発話」（点線の右側）の差は小さい。

表8 若年層・2拍名詞

	0型		1型		2型	
風	100	100	0	0	0	0
酒	100	100	0	0	0	0
石	43	36	0	0	57	64
胸	7	7	0	0	93	93
足	0	7	0	0	100	93
犬	7	7	0	0	93	93
糸	0	7	33	43	67	50
稲	0	7	29	50	71	43
海	0	7	29	50	71	43
数	7	7	36	50	57	43
肩	7	7	7	50	86	43
秋	0	0	43	57	57	43
汗	0	7	0	43	100	50

「石」「胸」（第2類）に2型が多く、また、第4・5類の「糸」～「猿」の語は中年層と比較して1型が増加している。すなわち、共通語化が進んでいる。

	0型		1型		2型	
窓	0	7	21	50	79	43
猿	0	7	14	50	86	43

表9 若年層・3拍名詞

	0型		1型		2型		3型	
桜	100	100	0	0	0	0	0	0
煙	100	100	0	0	0	0	0	0
頭	0	7	0	0	6	0	69	93
鏡	7	0	0	0	0	0	93	100
刀	14	7	0	0	0	0	86	93
仏	29	43	0	0	0	0	71	57
男	0	7	0	0	0	0	100	93
団扇	21	15	0	0	21	0	57	85
鋏	7	14	0	0	7	0	86	86
朝日	0	7	14	50	79	43	7	0
胡瓜	0	0	14	29	86	71	0	0
心	7	14	0	0	0	0	93	86
姿	0	43	21	29	50	29	29	0
涙	7	36	14	29	29	7	50	29
枕	0	14	7	21	21	14	71	50
油	14	38	0	0	0	0	86	62
柱	0	0	0	0	0	0	100	100
紅葉	0	0	27	57	60	36	13	7
兎	50	64	0	0	36	14	14	21
狐	36	57	0	0	43	21	21	21
雀	36	57	0	0	43	29	21	14
背中	14	57	0	0	71	14	14	29
鼠	43	64	0	0	50	14	7	21
蚯蚓	13	50	0	0	67	29	20	21
苺	29	71	0	0	64	7	7	21
菓	29	50	0	0	64	29	7	21
鯨	71	93	0	0	14	0	14	7
便り	0	0	36	57	36	43	29	0
後ろ	21	57	0	0	7	0	71	43
卵	0	0	0	0	86	93	14	7

中年層と比較して、「紅葉」と「便り」の1型の増加、「鯨」の0型のさらなる増加、「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」「蚯蚓」「苺」「菓」の0型の増加が認められる。すなわち、共通語化が進行している（共通語の型については表12参照）。

紅葉の1型

6%・19%=中 27%・57%=若

（左側は「方言的発話」、右側は「共通語的発話」。以下同じ）。

「便り」の1型

6%・13%=中 36%・57%=若

「鯨」の0型

44%・31%=中 71%・93%=若

「兎」の0型

19%・25%=中 50%・64%=若

「狐」の0型

13%・19%=中 36%・57%=若

「雀」の0型

25%・19%=中 36%・57%=若

「背中」の0型

19%・25%=中 14%・57%=若

「鼠」の0型

6%・13%=中 43%・64%=若

「蚯蚓」の0型

6%・6%=中 13%・50%=若

「苺」の0型

19%・31%=中 29%・71%=若

「菓」の0型

6%・13%=中 29%・50%=若

2. 4 少年層の調査結果

表 10 少年層・1拍名詞

	0型		1型	
血	100	95	0	5
戸	95	100	5	0
木	10	5	90	95
手	0	5	100	95

高年層・中年層・若年層と同様、「血」「戸」は大部分が0型であり、「木」「手」は大部分が1型である。「方言的発話」(点線の左側)と「共通語的発話」(点線の右側)の差はほとんどない。

表 11 少年層・2拍名詞

	0型		1型		2型	
風	95	95	0	0	5	5
酒	90	100	0	0	10	0
石	14	20	5	10	81	70
胸	20	5	5	0	75	95
足	10	10	0	10	90	80
犬	0	0	0	5	100	95
糸	0	5	50	90	50	5
稲	0	0	35	75	65	25
海	0	0	45	89	55	11
数	0	0	35	90	65	10
肩	7	5	30	90	70	5
秋	0	0	45	95	55	5
汗	0	0	30	95	70	5
窓	0	0	40	90	60	10
猿	0	0	45	95	55	5

第1類(風・酒)は0型、第2類(石・胸)と第3類(足・犬)は2型が大部分である点は共通語アクセントと同じである。

第4類(糸・稲・海・数・肩)と第5類(秋・汗・窓・猿)は、「方言的発話」では方言アクセント型である2型が多く、「共通語的発話」では共通語アクセント型である1型が多い。すなわちアクセントの使い分けが認められる。

表 12 少年層・3拍名詞

	0型		1型		2型		3型		共	方
桜	90	100	0	0	10	0	0	0	0	0
煙	95	100	0	0	5	0	0	0	0	0
頭	10	0	0	0	5	0	85	100	23	3
鏡	15	5	0	0	10	5	75	90	3	3
刀	25	10	0	0	0	0	75	90	23	3
仏	40	60	0	0	0	0	60	40	03	3
男	20	5	0	0	0	0	80	95	3	3
団扇	50	50	0	0	5	5	45	45	2	3
鋏	5	5	0	0	25	10	70	85	3	3
朝日	0	0	50	90	50	10	0	0	1	2
胡瓜	0	10	0	35	100	55	0	0	1	2
心	40	15	0	0	0	0	60	85	23	3
姿	0	10	50	80	50	5	0	5	1	3
涙	0	10	35	84	60	0	5	5	1	3
枕	20	15	25	50	25	10	30	25	1	3
油	50	75	0	0	5	0	45	25	0	3
柱	30	25	0	0	5	0	65	75	03	3
紅葉	0	0	50	95	45	5	5	0	1	2
兎	80	95	0	0	15	0	5	5	0	2
狐	63	95	5	0	32	0	0	5	0	2
雀	60	89	0	0	30	0	10	11	0	2
背中	70	95	0	0	30	5	0	0	0	2
鼠	70	90	0	5	30	5	0	0	0	2
蚯蚓	75	95	0	5	25	0	0	0	0	2
苺	70	80	0	20	20	0	10	0	10	2
薬	50	85	0	5	45	5	5	5	0	2
鯨	70	95	0	5	20	0	10	0	0	2
便り	10	15	40	75	40	5	10	5	1	2
後ろ	60	90	0	5	10	0	30	5	0	3
卵	10	0	0	0	86	100	5	0	02	2

でも方言アクセントでもない0型が50%見られる。

胡瓜→「方言的発話」では方言アクセント型と100%一致。「共通語的発話」では共通語アクセント型とほぼ一致している。

表 12 では、少年層の調査結果とともに、「共」の欄に共通語アクセント型を（注 1）、「方」の欄に、高年層の調査結果から推定される、この地域の方言アクセント型を記した（「共」の欄に複数の数字がある場合には、左側が高年層が使用している古いアクセント型、右側が若年層が使用している新しい型である）。

表 12 の調査結果を見ると、共通語アクセント型とほぼ一致している語が大部分であるが、一部に非共通語アクセント型（方言アクセント型）が多い語もある。

①共通語アクセント型、方言アクセント型の両方とほぼ一致している語→桜・煙・頭・刀・仏・男・鋏・心・柱・卵。

②共通語アクセント型とほぼ一致しているが、方言アクセント型とは不一致の語（すなわち共通語化が進んだ語）→朝日・姿・涙・油・紅葉・兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓・苺・薬・鯨・便り・後ろ（ただし、これらの語は、「方言的発話」では方言アクセント型がある程度見られる）。

③その他

団扇→共通語アクセント型とは不一致。方言アクセント型とは45%が一致。ほかに、共通語アクセント型とほぼ一致している。

セント型が 35% 見られる。

枕→「方言的発話」では 0 型、1 型（共通語アクセント型）、2 型、3 型（方言アクセント型）がほぼ同じ割合で見られる（すなわち個人差が大きい）。「共通語的発話」では 1 型（共通語アクセント型）がやや増加する。

3. 調査結果の概要

- ① 1 拍名詞は世代差が見られず、0 型（血・戸）と 1 型（木・手）の対立が明瞭である。
- ② 2 拍名詞は、第 1 類（風・酒）はどの世代も 0 型が大部分で世代差は見られない。第 2 類（石・胸）は世代が若くなるにつれて、0 型から 2 型への変化（共通語化）が認められる。第 3 類（足・犬）はどの世代も 2 型が大部分で世代差は見られない。第 4 類（糸・稲・海・数・肩）と第 5 類（秋・汗・窓・猿）は、高年層では 2 型が大部分であるが、世代が若くなるにつれて 1 型が増加する（共通語化が認められる）。第 4・5 類における第 2 拍の母音の広狭によるアクセント型の区別は、どの世代にも認められない。
- ③ 3 拍名詞は、多くの語について、世代が若くなるにつれて顕著な共通語化が認められる。とくに 2 型から 0 型への変化が著しい。
- ④ 高年層の一部（22 名中 3 名）、および、中年層の一部（16 名中 1 名）に無型アクセント（無アクセント）的な姿を示す話者が存在した（注 2）。

注記

1. 本稿で「共通語アクセント」としたアクセント型は、すべて『新明解国語辞典・第六版』（2009）記載のものである。この辞典は、規範としての標準アクセントではなく、現代東京語（若年層を含む）のアクセントを記載している。
2. 高年層寄りの世代（高年層・中年層）の話者に無型アクセント的な姿を示す話者が見られ、若年層寄りの世代（若年層・少年層）にそのような話者が見られなかった点は宮城県北西部の調査（佐藤 2011）でも認められた現象であり、その要因についての検討は今後の課題としたい（佐藤 2011 では、この問題について、いくつかの仮説を提示した）。

文献

- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究』塙書房
- 佐藤亮一（2005）「アクセント調査における「読ませる調査」と「言わせる調査」」佐藤喜代治博士追悼論集刊行会編『日本語学の蓄積と展望』明治書院
- 佐藤亮一（2011）「アクセント」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院
- 山田忠雄主幹（2009）『新明解国語辞典・第六版』三省堂